〈書評〉

諏訪部浩一・日本ウィリアム・フォークナー協会編

『フォークナーと日本文学』

（松柏社、2019 年）

山　本　洋　平

日本の小説家がウィリアム・フォークナーをどう受容してきたかという問題系は、これまでも繰り返し考究されてきた。だが、16 の論考を収める本書は、直接的な間テクスト性という次元を越えて双方の小説技巧と主題の深化を照射しあうことを目指すという点において、そうした既視感を良い意味で裏切る斬新なこころみである。従来この論点としては、大江健三郎や中上健次といったフォークナーからの影響を公言してきた小説家たち、あるいは大橋健三郎の論考が言及する福永武彦や井上光晴、小川国夫のような作家たちが比較対象に選ばれてきた。じっさい本書には大江の『万延元年のフットボール』をフォークナーが創りだした「ヨクナパトーファ」の神話的共同体との関連で詳述した藤平育子の論文、中上の『地の果て、至上の時』を『アブサロム、アブサロム！』からの影響を刻む小説としながらも、意図的に差異化されていると喝破する田中敬子の論文が収められている。

直接的な影響を公言する作家の系譜に阿部和重がいる。諏訪部浩一は、阿部の初期作品における「語るべきこと」のなさ、それゆえの技巧の未熟さを指摘しつつ、「メタナラティヴ」の発見を経て、サーガ形式へいたる技法の展開を跡づける。直接的な影響関係の言及はないものの、青山真治の小説『EUREKA』を取り上げた中野学而は、〈敗戦前〉の記憶に憑かれている錯誤的な感覚が両

者に共有されていると指摘する。かように、現代日本の小説家はその取り組みが真摯なものであるほど、フォークナーの遺産を重く受けとめていることがわかる。

藤平、諏訪部と同じく、フォークナー的技巧として「サーガ」という形式に注目した大地真介の横溝正史論は、大衆文学と目されてきた金田一耕助ものとの比較において、近親姦や旧家の没落といったモチーフを検証している。対照的に、武田泰淳『司馬遷』を論じる笹田直人は、フォークナーと共有する主題として、その歴史観に着目する。泰淳は歴史叙述における「中心の正統性」へ懐疑のまなざしを向けていたとし、一元的な歴史観への抵抗を示すという点において『アブサロム』と通底すると論じられる。泰淳の脱中心を志向する歴史観は、大西巨人の大作『神聖喜劇』とフォークナーの『寓話』を「言葉」の機能に注目して比較する金澤哲の論点にも繋がるものだろう。軍隊の「言葉遣い」をめぐる東堂の「正しい言葉」へのこだわりを、『寓話』の伍長の寡黙さ、カタログ的文体といった要素と結びつけ、両作品を「正しい言葉」の解体、〈父〉なる権威の瓦解を目指す脱中心的な抵抗を示す小説として位置づけている。

横溝論や泰淳論がそうであるように、本書の大きな特徴は〈フォークナー以前〉の作家を果敢に取り上げることで、これまでになかったような意想外な組み合わせを打ち出している点にある。わけても森鴎外を取り上げた新田啓子はその点について意識的で、鴎外が西洋諸国のみならずアメリカ文学の小説群を知悉していたことを確認した上で、来るべきフォークナーとの創作上の接点を「歴史の語り方」に定める。鴎外にとって、史実に基づく作風からの脱却――すなわち「歴史離れ」――は、フォークナーの有名な創作原理「アクチュアル」から「アポクリファル」への昇華と対応する。『アブサロム』におけるクエンティンとシュリーヴの対話は歴史を小説的真実へと接続させるこころみだが、そうしたダイナミクスを新田は鴎外の『興津の遺書』の改訂に看取する。後年、結末に付与された「落首」（世相を風刺した匿名の狂歌）に個別的な感情（すなわち「ディオニソス的なもの」）を読みとり、その改訂の意味を、精確さから心理の探究への遷移と捉える。と同時に、殉死や武家の精神を相対化し、復讐という暴力を未然に防ぐ物語の可能性を示唆する深い読みに、評者は心を動かされた。小説の内在的価値と外的社会への呼びかけという二律背反を突き破ろうとするフォークナー文学が見はるかされているからである。

島崎藤村の『家』とフォークナーの『土にまみれた旗』を並べ、両者に共通する〈家〉の呪縛を論じる後藤和彦は、アメリカ南部と明治末期の日本に共通

する失われた〈父〉の権威が不条理な形でよみがえってくる様相を捉えることから出発し、両作家が描く女性たちの分析へと論を展開する。ジョン・サートリスの妹ミス・ジェニーは、〈家〉の呪縛に翻弄される男たちを冷静に眺めつつも合理主義者にはならず、呪術によって「吹き出物」が治るという逸話を超然と受け入れるような女性として描かれている。いっぽう、藤村はフォークナー的な（あるいは中上『千年の愉楽』の結末場面のような）マジックリアリズムには進まず、あくまで〈家〉に生きる女性を書き連ねる。『興津の遺書』の鴎外と同じく、個人的な感情を描くために「歌」を利用する必要があったのは、自然主義の只中にいた藤村がその桎梏を自覚していた兆候と見なすことができよう。その意味で後藤の論考は日本で独自の歩みを辿ることになる自然主義文学の輪郭を別角度から照らしだす。

この文脈に徳田秋声『黴』を論じる小林久美子の論考を据えれば、「開き直り」や「現状そのまま」を体現する男（笹村）と庶民であることやめない女（お銀）の関係のうちに、自然主義小説の「表現機構」（安藤宏）の根深さを再確認することになるだろう。こうした秋声を漱石は「フィロソフィーがない」と批判したが、小林は秋声的なヴィジョンのなさと漱石的な人生訓、その双方が読みとれるのが『八月の光』であると論じる。この延長線上で阿部公彦の論考を読むと、荷風に認められて世に出た谷崎潤一郎が、『細雪』で自然主義を超克しようとしていたと理解できる。文体分析から論を起こし、登場人物の中心のなさ、感情の過多、病に身を委ねる登場人物の「受け身性」が次々と指摘され、個人の内面が浸透しあうような谷崎の小説技巧が浮きぼりにされている。

編者の諏訪部が序章で触れているように、フォークナーと同時代の横光利一のようなモダニストは、過剰なまでの自意識を小説でどう捉えるかという課題に苦心していた。かねてより近代に翻弄される個人の内面を探求してきた竹内理矢は、フォークナーの造形したクエンティンと太宰治との間に、生みの〈母〉からも育ての〈母〉からも疎外される自意識、という共通項を見いだす。『津軽』の修治も、『響きと怒り』のクエンティンも、近代化の波に呑みこまれ、故郷との狭間で翻弄されながら、〈母〉を喪失する。こうした俯瞰的な議論にそって、『響きと怒り』の各場面――「クリスマス・ギフト」とクエンティンが黒人に呼びかけるときの複雑な内面、「ディルシー」と独り言のように呼びかける独白の裏側にある淀み、そして娘が（「近代」を象徴する）「自動車」を所有したことを喜ぶ母キャロラインの刹那の恍惚――が繊細に分析されている。ここで問うてみたいのは、クエンティン同様、自らの手で生を終えることになる太宰

と、生き永らえたフォークナーとを切り分けたものは一体なんだったのかという疑問である。クリストファー・リーガーの三島由紀夫論とともに考えてみたい問いである。

太宰が〈母〉の回復（の失敗）を宿命づけられていたとすれば、まさしくその〈父〉の呪縛を運命づけられた作家が津島佑子である。津島文学の変転をフォークナーとの関わりから跡づける千石英世は、津島中期の作品を「二重小説」と呼ぶ。悲痛を描く「独白的手記」とその悲痛を客観的に記す文章を同居させる「二重小説」は、中期と後期を画する『火の山――山猿記』によって解体される。さらに叙事と叙情とが溶融した小説『ナラ・レポート』、自伝的な独白を小説が呑みこむ『真昼へ』によって、この自己解体は強固なものとされる。本論文はそれじたい、批評と語り、信念と懐疑の境界を解体するような文体で書かれ、千石英世という批評家が津島のみならず、これまで論じてきた小島信夫や『響きと怒り』のフォークナーを回顧しながら、みずからの批評をふりかえる文章となっている。

千石の論考が示しえたように、女性作家とフォークナーとの対置は、多くの可能性を宿している。倉橋由美子の『夢の浮橋』論を軸として、サーガという形式やインセストという主題を論じる花岡秀の論文は、小説というジャンルにたいする意識的実験を浮きぼりにしているし、ここで阿部公彦が今村夏子を論に引きこんでいたことを想起してもよい。日本の女性作家がいかにアメリカ・モダニズム小説の表現機構を受容してきたのか、今後いっそうの研究が進められるべきだろう。内的独白や特異な視点からの描写を駆使し、あらたなる小説の言葉を紡ごうとする女性作家として川上未映子、村田沙耶香、藤野可織、宇佐見りんの名前を挙げておきたい。その場合、村上春樹を経由しているケースが多分にあり、その影響の範囲をどう見きわめるかが難題ではあるものの、トニ・モリスンによるフォークナーの有機的受容を補助線とすれば、実りある議論が可能かと思われる。

かくしてフォークナーを日本の作家たちと比較することであぶりだされてくるのは、モダニズムの小説的技巧や近代小説の表現史だけではない。限定的な視点、語りの複数性、意識の流れ、線的物語を相対化するサーガ形式といった小説技巧は、作家が抱えこむ苦悩によって同時発生的に生み出されたと考えられるべきで、だからこそ、その逡巡が深ければ深いほど、複雑な表現技巧が探究されることになる。本書が我々読者に突きつけるのは、そうした苦悩と向き合う小説とはいかなるものか、という問い――この〈私〉と〈私〉を取り巻く

国、故郷、家族との居心地の悪い関係は何に由来するのかという根源的な苦悩に、小説はどう対峙できるのか、という問い――である。南北戦争以来のアメリカ南部と開国以来の日本が共有してきた「ねじれ」た過去を小説を通じて考えようとする者にとり、本書は将来にわたって折々読みかえすべき書物となるにちがいない。フォークナーと日本文学をたがいの深淵をのぞきこむようにして掘りさげた本書は全体として、もはや日米の作家を対置させる比較文学の枠組みにとどまらない。ある小説が別の小説の可能性を乱反射的に照らしだす文学論の様相を呈しているからだ。個別的な生を屹立させることと、自己と他者との間に流れる回路を探しあてることを同時に志向する、豊穣なる文学空間がここにはある。